

遠別水稲発祥地の碑

先人のたゆまぬ努力が築いた
日本最北の稲作地帯



日本最北の稲作地帯として知られる遠別町共栄地区には水田を背に「水稲発祥之碑」が建てられています。この碑は昭和32年(1957年)に発足した遠別町稲作経営研究会が創立20周年の記念に、遠別の稲作の礎を築いた南山仁太郎氏の功績をたたえて建立したものです。

遠別町の稲作の歴史は明治30年(1897年)に試作をした中村亀吉氏が起源とされますが、越前からの入植者、南山氏が明治34年(1901年)に遠別川の水を引いて田を作り、上川産の種子で収穫に成功したことが稲作発展の契機となりました。南山氏は当初、福井県から取り寄せた種子で3反歩ほどの耕作をしましたが、気候が合わずに失敗。翌年にもやはり本州から種子を取り寄せたものの、これも失敗に終わり、3度目にして耐寒性のある上川産の種子と出会い、成功を収めるに至ったのです。これをきっかけに、各地で水田熱が高まり、大正10年(1921年)には土功組合の設立で灌がい工事が進み、水稲栽培が本格的に行われるようになりました。南山氏をはじめ、入植者達が「この地でなんとか米を作りたい」という夢を捨てなかったことが、「稲作北限のまち」へとつながったのです。昭和24年(1949年)には、石黒初明氏が米作日本一表彰競争大会で反収11俵という驚異的な収量を上げて入賞したことも、遠別稲作の金字塔として歴史に刻まれています。

昭和30年代後半からは米の生産過剰で水田利用再編対策が取られ、水田の約半分にあたる660haが転作を義務付けられて流通性の良いもち米に転換。昭和58年にはもち米生産団地に指定され、日本最北の稲作地帯は今も健在。見渡す限りの原始林を切り開き、笹や雑草を刈って農耕に励んだ先駆者達の努力は遠別町産のおいしいお米へと引き継がれています。

見どころ

遠別町の水田は北緯44度45分、東経141度52分に位置し、水稲としては世界最北とも言われています。遠別より北の地域でも稲作は行われていますが、多くは自生種や陸稲(おかぼ)のため、遠別町の水稲が日本、そして世界最北になるわけです。

ポイント

遠別川流域で発展した遠別町の水稲は現在、もち米を中心に生産されています。もち米を使った特産品もあり、もち米100%の純米酒「北吹雪」やもち米と地元の小豆、白花豆を使った「たわら最中」は道の駅などで購入できます。

五感で感じる！風土資産の魅力



昭和26年に発売された遠別名産「たわら最中」は、あんの中に入った白玉粉がもちを連想させ、北限の米どころを象徴する銘菓として人気です。



つぶあん和白あんの2種類があります。
お買い求めはハヤシ屋野村まで。

■ 基本情報 (R3.5)

—